

## 第19回 IHP 研修コース

「気候変動下の水資源と水災害 ～予測、影響評価、適応策～」の実施報告

2010年3月18日

京都大学防災研究所水資源環境研究センター 竹門 康弘

2009年11月29日から12月12日の2週間にわたり、UNESCO国際水文学計画(IHP)短期研修事業(IHP研修コース)の第19回目を実施した。今回は、「Water Resources and Water Related Disasters under Climate Chang (気候変動下の水資源と水災害 ～予測、影響評価、適応策～)」をテーマに開催した。本研修コースは、1) アジア・オセアニア地域における気候変動下の水資源と水災害について最新の知識を学ぶこと、2) 全球規模あるいは流域規模で生じる水文事象の変化を評価あるいは予測するための技術を学ぶこと、3) その技術の一部を実習で体験し習得のための糸口とすること、ならびに4) 全球規模あるいは流域規模で生じる水文事象の変化に対する適応策について考察することを目的に実施された。内容は、7日間の講義、1日の実験、1日の演習に加え、1日は琵琶湖、瀬田川、宇治川の現地視察で構成した。講義では、気候変動下の水資源と水災害の変化の全容を知るために、大気、気象、斜面流出、地下水、河川、湖沼、海岸、海域の水文現象をカバーできるように、京都大学防災研究所、京都大学工学研究科、京都大学東南アジア研究センターの教員に講師陣を編成していただいた。実験では、実験水路で土石流を実際に起こす実験、同じく実験水路で天然ダムが崩壊する様子を再現する実験、内湾の模型に津波を起こす実験を行った。これらの実験は、京都大学防災研究所宇治川オープンラボラトリーで実施した。また、演習は、3グループに分かれて、GCM出力値の誤差の検出とその修正の作業を体験する演習、GCM出力値を流出モデルに組み込み流量予測をするプログラムを動かす演習、そして津波時の波動モデルをプログラムする演習を行った。さらに琵琶湖、瀬田川、宇治川の現地視察では、まず琵琶湖博物館で研究員から英語の講習を受けた上で、館内を見学し、南郷洗い堰や天ヶ瀬ダムの見学を行った。

今回参加した研修生は、東アジア・東南アジア、南西アジア諸国より8名のUNESCO派遣研修生、京都大学防災研究所の招聘した2名の研修生、自費で参加した2名の研修生、そして京都大学防災研究所の研究員や京都大学大学院工学研究科の博士後期課程(留学生特別コース)に在籍している7名名を加えた合計19名であった。受講者は2週間にわたるトレーニングコースに熱心に取り組み、講義、実験、演習では真剣な質疑が飛び交った。受講生にとって、研究の最前線に携わる現役研究者から直接指導を受けられただけでなく、普段接することの少ない近隣諸国の同業者と交流できる機会となった。また、受講者の作成したレポートには、トレーニングコースで得た知識や経験を各国における実務や研究に活かそうという決意が示されていた。

講師の皆様とサポートの方々の多大なご協力のおかげで、この2週間にわたって事故や大きな問題はまったくなく、研修生は講義や実習に集中でき、さらに貴重な見学旅行を経験するなど、充実した2週間を送ることができた。これもひとえに、名古屋大学、京都大学各研究機関での激務の合間を縫い協力をご快諾いただいた講師陣をはじめ、見学を受け入れていただいた琵琶湖博物館、そして文部科学省およびUNESCO-IHP事務局の方々のご尽力の賜物である。ここに記して感謝申し上げる次第である。